

預言者が敬われない

マルコによる福音 6:1-6

(そのとき、) イエスは故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡りお歩いてお教えになった。

説教

マルコの福音を3部構成とする見方があります。宣教開始のプロローグがまずあり、人々に神の国の到来を告げる宣教活動のガリラヤ編が第一部、第二部はきょうの6章から10章までで、弟子たちにご自身を明らかにしてゆく、メシアの秘密を明かし編。第三部は11章から最終の16章の十字架と復活編です。

この見方でいけば、きょうの聖書テキストでご自身を明らかにしようとしたイエスは親族や幼馴染みたちに理解されず、ふるさとの人々、顔なじみのおじさん、おばさんに捨てられる、身内に裏切られる、これからイエスの身におきる出来事を暗示しているようです。

イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。 4節

吉本隆明はこのことばにコメントして、これほどの真理を言い切っているイエスは、そして聖書はすばらしいと感嘆しています。（喩としての聖書——マルコ伝 吉本隆明）

わたしが読む限りの聖書解釈本ではこの4節のことばは当時の諺だといって片付けてしまっています。はたしてイエスは諺をつぶやいただけなのでしょうか。それともこれは真理であって、わたしたちも含めてイエスを敬うことはできない、仮にそれができたとしても揺らぎ多いものなのでしょうか。

ところで冷遇されるとわかっている故郷ナザレになぜイエスは足を踏み入れたのか。聖書にはそのわけが書いてありません。三つの理由を考えてみました。

1、イエスは自分の力を郷里の人に認めてもらいたかった。

いわゆる故郷に錦を飾るという理由です。錦を飾り、未亡人となった母マリアに楽をさせたかったと思った。

2、イエスは郷里の人の誤解を解きたかった。

身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。マルコ3:21

ガリラヤの各地でのイエスの癒し、奇跡が評判になるとともに批判も高まってきて、ナザレから母マリアと兄弟がやってきてキチガイ扱いされているイエスを確保しにきたことがありました（マルコ3章）この誤解を解くためにナザレにやってきた。

3、イエスは郷里の人に神の国の到来を伝えたかった。

イエスは自分の兄弟姉妹、親戚、故郷の人々にも福音を伝えたかった。とくに母マリアは天使から直接、神の子イエスの誕生を告げられています。その子は、確かに私です、と伝えたかった。

どれも勝手な想像ですが、ナザレの人たちの反応はどうだったかという聖書はこう記します。

安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。6:2-3

驚いたけれど、つまずいた。つまずくというのは聖書の用語ではよろける、ころぶという意味ではなく、原意から転じてイエスを信じない、つまり不信仰という意味でつかわれます。

それに対してイエスの反応はというと

4節の「**預言者が敬われない…**」につづいて5節でごくわずかの病人をいやしただけで、奇跡はおこせなかった。

そして、人々の不信仰に驚かれた。6:6

とあります。ナザレの人たちは驚き躓き、イエスはその不信仰に驚いた。

ナザレの人たちはイエスの教えに対して恐怖に震え上がり、一方のイエスは人々の反応があんまりなのでびっくりしたということが記述されます。

マルコの福音では「**イエスも驚いた**」と記述されて終わりますが、ルカ福音書の平行箇所では会堂でイエスが説教したあとはこうなっています。

これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。ルカ 4:28-29

殺されかけたイエスは間一髪でのがれ故郷をあとにします。

ずっと時代が下り、そして場所も変わりますが、石川啄木はこう歌いました。

石をもて 追はるがごとく

ふるさとを

出でしかなしみ 消ゆる時なし

啄木のうたはそれなりにわかり易いし、その悲しみを共有というか同情できるところがあるとおもいます、しかし、ナザレを追われるイエスの心情はいかばかりだったのか、わたしたちは安易に想像することをひかえます。

〔まとめ〕

先週の福音では「恐れることはない。ただ信じなさい」とイエスは会堂長にいいました。でも私たちは畏れることなく「ただ信じる」ことができるでしょうか。ただ信じる、そのことを続けていくことができるでしょうか。日々の暮らし、毎日まいにちがいい事ばかりあるわけではありません。どっちかといえばいやな事、辛いことが多い日々です。イエスはいやな事には蓋をして、いいことだけを思いなさい、という意味で「恐れることはない。ただ信じなさい」といつているのでしょうか。

ちつと手を見る、啄木はこう歌いましたが、わたしたちキリスト者は手を見るのではなく、じつと十字架を仰ぎみます。

だれでも、普通なら、このナザレの田舎の人々のように、イエスに躓くはずで、それくらい信じがたいことをイエスは主張しています。人生には色々つつまずかせる小石がおっこっていますけれども、考えてみればイエスほど大きな石はありません。イエスに躓く、不信仰に陥る、けっして不信仰をすすめているわけではなりません。ナザレの人たちが陥った不信仰をパウロが奨める「弱さを誇る」という意味を通してさかさまに見ると私たちへの福音となるでしょう。

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。II コリ 12:9a